

森鷗外のフィヒテ哲学受容

『舞姫』から『キタ・セクスアリス』へ

玉田 龍太郎(滝川中学校・高等学校)

森鷗外の『妄想』(1911年)は、鷗外が50歳を過ぎ自らの精神的遍歴を振り返った自伝的小説であり、20代のベルリン生活を通じて、人生の寂しさを慰めるために哲学書を渉猟した日々が描かれている。鷗外の哲学への傾倒を論じる際には、特にハルトマンの形而上学との関連が旧来の研究で注目されてきた。しかし実際には鷗外はショーペンハウエルからニーチェ、そしてハルトマンへと引き継がれた厭世哲学に満足しておらず、むしろベルリン時代に広い視野で哲学的知見を深めるため、F. K. A. シュヴェーグラーの『哲学史要』(1848年)に広範に書き込みを行い、西洋哲学の理解を深めたことが既に明らかになっている。神田孝夫も、シュヴェーグラーを最大の哲学教師として鷗外が熱心に哲学を学んだことを指摘しており、鷗外を哲学者として考察する際にはハルトマン的な厭世哲学に限定せず、シュヴェーグラー哲学史の視点から広く検討する必要がある、特にドイツ観念論の哲学者の思想との関連研究が進められていくことが肝要である。松村友視は、鷗外がフィヒテとシェリングに強い関心を持っていたことを指摘しているが、本発表では、この研究動向を受けて、鷗外のフィヒテ哲学受容について検討を進めていく。

本発表では、まず山崎正和の森鷗外研究を踏まえ、鷗外文学の本質について考察する。山崎は、明治期の日本人の「自己の内発的な衝動を持たない姿」を通じて、日本人に「ファウスト的な無条件の自我拡張の伝統がない」ことを指摘する。山崎によると、明治国家の急速な拡大により、日本人の個人の身元証明が二重の仕方で脅かされた。政治的国家の内部での位置と役割が曖昧になると同時に、私生活の文化が政治に吸収された日本人は「深い文化的喪失感」を抱くようになったのである。山崎は、荷風や漱石がこの「二重の自己喪失」に苦悩したことを挙げ、彼らがここに作家としての感情の原点を見出して得たのに対し、彼らより一世代先行する作家の鷗外はより複雑な感情を抱えていたとする。山崎は、鷗外が1886年の「日本の実状」においてフィヒテの理想国家に着目し西洋の経済的エゴイズムを批判していることを示す。即ち鷗外の憤りは、自らが日本の文化を守るために政治的国家と一体化せざるを得なかったことから生じた。彼は、近代的理性が提示する「自我」の概念が日本人の精神には「存在しない」と感じ、これが彼の苦悩と深く結びついたのである。鷗外は自らの内面に自我が存在しないことに敏感であったが、このギャップに折り合いをつけることができず、内面の空白を凝視する作家としての基本姿勢を打ち出した。彼の文学的テーマは、自己表現と自己抑圧の間で揺れ動く苦悩を反映し、最終的には自我の手ごたえを求め続ける終わりのない彷徨に他ならなかった、と。

ところで、森鷗外は先の「日本の実状」において、フィヒテの『閉鎖商業国家』(1800年)に触れている。この『閉鎖』は、フィヒテのポピュラー哲学『人間の使命』と同年に書かれた、彼の思想の転換点に位置する著作である。フィヒテは、対外貿易を禁止し自給自足の体制を確立することを理想とし、これにより自国の平和を守ることを提案したが、このようなフィヒテの理想主義的な考えは、当時の国際情勢下では非現実的とも言えるものであったにもかかわらず、開国前の日本がその理念に近い状況にあったことを鷗外は強調した。鷗外はシュヴェーグラーの『哲学史要』を通じてフィヒテの倫理的観念論を学び、『閉鎖』以前に出版された『道

徳論の体系』(1798年)の衝動論に特に関心を寄せていた。鷗外はシュヴェーグラーにしたがいフィヒテの衝動論を三つの衝動に分類する観点から、純粹衝動から倫理的衝動、そして自然衝動へと向かう関係を分析した。これらの衝動の在り方の究明が、自らの作品内において鷗外にとって重要な哲学的課題となったと考えられる。また屢々鷗外研究で参照される彼の「心理学表」においては、衝動が魂と意識、人格を仲立ちする役割を果たすと考えられたものの、その具体的なメカニズムは明確ではない。この空白部分を埋めるためにフィヒテの衝動論が有用であったとも考えられる。実際、鷗外はその作品においてこれらの衝動の在り方を探求しているといえ、彼の哲学的な取り組みは具体的な作品に反映されていく。この見地から本発表では、鷗外の『舞姫』から『キタ・セクスアリス』へと至る作品展開を通じて、彼のフィヒテ哲学への関心がどのような仕方で反映しているかを、本邦近代文学研究上の先行する研究成果を基に考察していきたい。

本発表においては、鷗外の『舞姫』と『キタ・セクスアリス』を通じて、両作品における性の聖化について検討していく。『舞姫』においては、主人公・太田豊太郎がベルリン留学中に外国文化に触れ、内面的な目覚めを経験し、踊り子エリスとの恋愛に発展するが、友人の勧めで彼女と別れることになり、エリスの狂気と豊太郎の帰国が描かれた。本作品は近代日本文学におけるロマンチズムの先駆けとして評価されたが、ここでの豊太郎とエリスの恋愛は現実的なものというよりむしろ観念的なものであり、鷗外が文学の「イデアール」を示したものとされている。他方、『キタ・セクスアリス』は、哲学者・金井湛が自らの性欲の歴史を描くという仕方で展開し、作中で鷗外は自然主義に対抗しつつ、清冽な美しさを表現したものとされる。本作品が発禁になった経緯については、現在の性意識からは理解しがたい部分もあるともいわれるが、大屋幸世によると、作品の主題は性表現そのものではなく、むしろ他者からの性意識の排他性や密儀化に関するものであり、これは近代日本の性に関する制度化の過程と関連づけられる。また、作品内のエピソードを通じて、祭りや廓の文化が近代において次第に制度的に禁止されていく様子が浮かび上がるのであって、ここにおいては性意識の排他的な側面が強調されている。大屋は、鷗外は作中で性の聖化を試みた結果、彼の恋愛観は抽象的なものにとどまったとする。こうして『キタ・セクスアリス』は、観念的な性意識を描いた作品であるといわねばならないが、このような鷗外作品の在り方にフィヒテ哲学が与えた影響を、哲学と文学の対話を試みる見地から検証していく。

<参考文献>

神田孝夫「森鷗外とE. V. ハルトマン——『無意識哲学』を中心に」、『比較文学比較文化——島田謹二教授還暦記念論文集』島田謹二教授還暦記念会、弘文堂、1961年、587～608頁
山崎正和『鷗外——闘う家長』新潮文庫、1980年
大屋幸世『「キタ・セクスアリス論」——<制度>としての<性>』、『森鷗外——研究と資料』翰林書房、1999年、96～108頁
ヨーゼフ・フルンケース、和泉雅人、村松真理、松村友視「シュヴェーグラー『西洋哲学史』への森鷗外自筆書き込み——翻刻および翻訳——」、『藝文研究』第86号、慶應義塾大学藝文学会、2004年、155(220)～251(124)頁
松村友視「初期鷗外のシェリング受容——シュヴェーグラー『西洋哲学史』への書き込みを中心に」、『文学』第8巻・第2号、岩波書店、2007年、2～20頁